

## 論文要旨

学位論文題目：里親であることの葛藤と対処 —— 家族的文脈と福祉的文脈の交錯 ——

氏名：安藤藍

### 目的と研究方法

「里親」とは、諸事情により出身家庭では育てられない子どもを自らの家庭にあずかり、一定期間養育する人びとをいう。近年、児童虐待の社会問題化などを背景に、里親に対する社会的な期待は高まりをみせている。日本の里親研究は、その低い運用率ゆえに、「なぜ里親制度は普及しないのか」という問いのもと、制度運用の検討やその普及を促す視点が主流でありつづけてきた。最も蓄積の厚い児童福祉分野の先行研究では、里親制度の普及を妨げる原因を見極め改善し、さらに里親を支援するといった実践的な研究が主である。一方、近年蓄積されつつある非血縁家族の一形態として里親経験をよみとく研究では、家族的文脈を重視し、里親があずかる子どもの親になることを所与のものとしている点では問題が残る。いずれの見方も、里親が家族的文脈と福祉的文脈の交錯する場におかれるという立場性の複雑さを十分には捉えてこなかったのである。

本研究は、福祉的文脈と家族的文脈が交錯する場におかれている里親たちの語りを素材として、かれらが福祉的な規範的期待や家族的な規範的期待をいかに使い分け、またこれらに拘束されつつ、どのように里親という役割行為を行っているのかを、2つの文脈が埋め込まれる規範構造とのかかわりから分析することを目的とする。

分析にあたり、家族的文脈と福祉的文脈の交錯という前提が顕在化すると考えられる、里親制度の2点の特徴を手がかりとした。第1に、子どもと養育者の関係に法的に期限が設定されている点で、「親子関係」と異なる。これを「時間的限定性」とした。第2に、とくに社会的養護にかかわりのない「親」に比べて、里親が子どもの当面の養育方針や長期的な人生設計に関与できる度合いが小さいことを「関係的限定性」とした。この2つの「限定性」にまつわる葛藤と対処を考察していった。

上述の基礎概念を用い、以下の3つのリサーチクエスチョンを設定した。

- 1 「家族的文脈」と「福祉的文脈」が交錯するところに位置づく里親たちは、「時間的限定性」を意識したとき、自身の役割をどのように認知し、里親であることを意味づけているのか。また、役割間に葛藤が生じた場合はどのように対処されているのか。
- 2 「家族的文脈」と「福祉的文脈」が交錯するところに位置づく里親たちは、「関係的限定性」を意識したとき、自身の役割をどのように認知し、里親であることを意味づけているのか。また、役割間に葛藤が生じた場合はどのように対処されているのか。
- 3 「福祉的文脈」において里親子の関係を規定していた措置委託が終了することで、里親は自身の役割や子どもとの関係をどのようなものとして意味づけ、対処するのか。

研究の方法は、首都圏に在住の里親23ケース26人（3家庭は夫婦）への半構造化インタビュー調査による語りの分析を行った。本研究から得られた結果をまとめると以下のようになる。

## 結果・考察

①「時間的限定性」をめぐる葛藤と対処については、主に第4章で取り上げた。まず、里親たちは、受託にともなう問題行動などの中途養育・里子養育の困難に直面したとき、一般的な子どもイメージを子どもに押し付けず、個々の子どもの生育歴に応じた対処をしようと心がけていた。しかし一方で、年齢相応の子ども像や血縁親子、家族イメージを資源として里親子を説明しようとする文脈もあった。つまり、里親たちは家族、親子であることを志向しつつ、福祉の担い手としての意識を保つ調整を日々行っているわけであるが、ときにその調整が困難をきたすことがある。子どもの受託期間の見通しが不透明であるとき、里親は、実親家庭への復帰や自立の準備と里親家庭での愛着関係の構築との間で板挟みになる場合があった。子どもの年齢と実親家庭への復帰可能性によって生じる「将来的な時間共有の曖昧さ」が、家族的役割と福祉的役割の間の調整を困難なものとし、里親たちに葛藤をもたらしていた。

②第5章と第6章では、「関係的限定性」概念を中心にその葛藤と対処について考察した。福祉専門職にしる、実親にしる、里親家庭外部のアクターが養育に関与することによって、里親はその立ち位置を再考する必要に迫られる。とくに、関与者が実親で、実親子の交流がある場合は、里親は「親であるか実親（家庭）への支援者であるか」の葛藤が生じていた。また福祉専門職らと比較した際には「家庭性」に価値を見出す傾向があった。つまり、実親を想定したときには、養育内容や子どもへの気持ちを限定化し、福祉専門職らを想定した場合には、養育内容や関係の期間をなるべく限定化しない方向へと向かおうとしていた。里親たちは、子どもの実親家庭の成員らや、もとい施設職員の職員、児童相談所の児童福祉司らとの直接・間接のやりとりを通じて、自らの立ち位置を再帰的に意味づけ直していた。

③制度上の里親子関係が終了して以降の里親子の関わりでは、「18歳」という措置委託解除に際して「責任の終わる節目」と、今後の関係継続を見越した「通過点」という見方があった。ただし、里親は子どもの実親よりも高齢であることが多く、面倒をみつづけることは難しい。「通過点」と「責任の終わる節目」の狭間で、里親たちは大人同士の適度にサポートティブな関係の継続を望み、そこに至るための「経済的、生活的な自立」、「実子や他の里子に影響を及ぼさない」等のいくつかの区切りを設定し、子どもとの意向を調整していた。しかし、子どもが里親のできる閾値を超えた対応を望むことがある。また、自分がその子どもに関与してきたことがどのように子どもの成長に寄与したのか、客観的な指標による測定は困難で、里親として自信がもてないこともある。そのような場合、できることはやっとなと仲間で認めあうなどして、納得する様子がみとれた。

## 結論

本研究は、「家族的文脈」「福祉的文脈」、「時間的限定性」「関係的限定性」概念を用い、里親経験をよみとくことを試みてきた。リサーチクエスチョンに対応した里親制度の「限定性」をめぐる葛藤と対処をまとめつつ、それらに通底する「子どもに向かう無限定な志向」について考察した。すなわち、里親たちが経験する様々な葛藤には、制度的枠組みとケアの「無限定性」という性質とのあいだのアンビバランスにいかに対処するのか、という通底した困難が反映されていると考えられた。里親たちはなぜ子どもへの無限定な志向にからめとられてゆくのか、そして里親の制度枠によって「わりきる」ことに対する抵抗とは何を意味するのか考察した。最後に、「家族的文脈」「福祉的文脈」概念設定による成果と新たな議論について述べた。